

コリマ・ユカギール民話文体論の試み⁽¹⁾

——節連鎖を中心に——

A stylistic approach to Kolyma Yukaghir folktales:
With special reference to clause-chaining constructions

遠 藤 史
Endo, Fubito

ABSTRACT

This paper approaches Kolyma Yukaghir folktales, which have been told by the Kolyma Yukaghir people in northeast Siberia and sporadically recorded by ethnologists and linguists, from a stylistic point of view. A special reference is made to the clause-chaining construction, one of the major types of complex sentences in the language. It is shown that, based on the analysis of two folktales, the frequency of the construction significantly varies from tale to tale. The author tries to relate this observation to how each storyteller tells a tale in his or her favorite way with the emphasis on particular features (e.g. characters, storyline, background and settings) in the tale.

1. はじめに

この論文の目的は、北東シベリアの少数民族言語であるコリマ・ユカギール語 (Kolyma Yukaghir) による民話を対象として、この言語が示す文法的特徴のひとつである節連鎖 (clause chains; clause-chaining constructions) に特に注目

(1) 本論文の研究成果の一部は以下の科学研究費補助金から補助を受けた：文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東シベリアの古アジア諸語にかんする緊急調査」(平成 12～14 年度, 12039228), 同基盤研究 (B)「北方諸言語の類型的比較研究」(平成 15～17 年度, 15320047), 同基盤研究 (C)「コリマ・ユカギール語辞書作成の基礎的研究」(平成 17 年度～, 17520265)。

しつつ、若干の文体論的考察を試みることである。

シベリアの北方少数民族がそれぞれの文化の中で長い歴史をかけてはぐくんできた伝統のひとつに民話がある。⁽²⁾民話は口承文芸に属するもので、基本的には文字で書かれることはなく、語り手によって口頭で語られる。また民族によって状況は異なるが、創世神話・動物昔話・世態昔話・英雄叙事詩などいくつかのジャンルを持つ（斎藤 1993:30-31）。民話の語り手は、自民族の伝統の中にある民話を中心に、自分の好みに応じた変容を随時そこに加えながら物語を語り進めていく。その物語の中に他民族の民話——他の北方諸民族の民話・ロシア民話・ときには聖書さえ——の要素が取り入れられることも稀ではないし、語り手の興が乗れば、新たに創造された部分が組み込まれることもある。この意味で、民話の語りは民族の伝統であると同時に、語り手による創造行為の一面があるといえることができるだろう。

これら北方少数民族の民話は従来、ふたつの視点から主に考察されてきた。そのうち一般に広く知られている視点は、民話の中の様々なモチーフを分析し、そこに潜む認識の体系あるいは世界観を見出そうとするものである。いわゆる神話学的研究と呼ばれているものがこれにあたる。この視点に立つならば、ある民族と他の民族の民話に見られる共通点を探求し、相互影響の可能性や世界観の類似性の指摘といった比較文化的アプローチに踏みこむことも可能になる。⁽³⁾その基礎にはもちろん人類学・神話学の研究成果があり、シベリア民話の場合は旧ソ連・ロシアにおいてそのような成果が積み上げられてきた。もうひとつ

(2) 日本語で読めるシベリアの少数民族の民話コレクションとしては、たとえば斎藤編訳（1988）がある。ただし、この本の中には残念ながらユカギール人の民話は収録されていない。また斎藤（1993）でも、論じているテーマに関連したシベリア諸民族の民話が要約で紹介されている。

(3) 日本語で読めるそのような試みのひとつとしては斎藤（1993）がある。その第5章では北方少数民族の様々な天地創造神話が検討されている。その中の分析のひとつでは、アジア・エスキモー、ユカギール、北米インディアンおよび日本に共通する「カラスとフクロウ」の系統の民話に共通して認められるモチーフを検討することによって（169-171）、「昼と夜の分離、天と海の分離、陸鳥と水鳥の分離など、今日の世界秩序発生の由来を物語る話であることがわかる」（170）という一般化が引き出される。

の視点は、民話を北方少数民族言語の言語学的研究を進める上での貴重な言語資料として扱うものである。現地調査によって言語の研究を行う場合、母語話者に調査者が質問することによって組織的に引き出されたデータ (elicited data) と、話者の自発的な談話を記録したデータ (text data) をバランスよく用いることが望ましいとされる (Payne 1997:366-371)。この後者のデータを具現するきわめて良質の言語資料として、民話は記述言語学の研究で伝統的に用いられてきている。事実民話テキストの分析によって文法の細部の記述が可能になった事例は多い。

本論文で扱うのは、これらふたつの視点の狭間にあって従来ほとんど論じられることがなかった第3の視点である。つまり様々な民話テキスト中に見られる、語り手による言語形式の選択の差異に注目することにより、個々の語り手が民話の内容をどのように扱い、それをどのように語るかを観察しようとする文体論の視点である。⁽⁴⁾ いまだ萌芽的な試みではあるが、原語によるコリマ・ユカギール民話の語りの分析を通じて、このような視点によって捉えられるものの可能性を探索してみたい。従来の神話学的分析が民話研究で対象としたものは、その話 (narrative)、つまり物語の中身に集中している。たとえば北方少数民族の民話の神話学的研究はもっぱら民話のロシア語訳・要約を参照することによってなされており、そこにはあたかも原語によって語られた民話は存在しないかのようである。これに対して本論文では、民話の語り (narration)、つまりそれをどのように語るかという技法的な側面に注目してみたい。民話はその民族の伝統の一部をなすものならば、民話がその「生命力」を最も発揮するのは、やはりその民族自身の言語によって語られたときであろう。その力に潜むものを解き明かすにはやはり他言語への翻訳ではなく、原語のテキストに当たることが

(4) 本論文でいう文体論は、現代言語学 (主として構造言語学) の概念を文学研究に応用するという方向性を持った新文体論 (new stylistics) を念頭においている。この方法を英米小説の分析に適用した成果のひとつとして Leech and Short (1981) を参照されたい。またこの段落で言及した語り (narration) と話 (narrative) の区別については斎藤 (2000:103) を参考にした。

最も有効ではないかと考えるからだ。

この論文の構成は次の通りである。次の第2節では、コリマ・ユカギール人の民話の伝統に関する特徴、および主な民話テキスト資料について述べる。続く第3節では、筆者も直接会って調査したことのあるコリマ・ユカギール民話の語り手2人の民話テキストに基づき、節連鎖という言葉形式に注目しつつ、文体論的考察を試みる。第4節は議論のまとめである。

2. コリマ・ユカギール民話の概略

コリマ・ユカギール人の民話の伝統は、すでに長い間にわたって存続していると考えられる。たとえば、今から約百年前の20世紀初頭にユカギール人社会を民族学の立場から現地調査したヨヘリソン (Waldemar Jochelson) は、のちに出版した浩瀚なユカギール民俗誌で、4章を費やして民話の紹介を行った (Jochelson 1926; Chapters XI–XIV)。そのうち2つの章 (第11章と第12章) には原語 (コリマおよびツンドラ・ユカギール語) のテキスト計11篇と翻訳が収められている。各民話は2~4ページの長さで複数の登場人物を持つ。一例として第11章の最初の民話 (本文2ページ半) の内容を見てみよう。この民話は、ふさぎの虫に取り付かれた兄、兄と妹の近親相姦的結婚の提案、満月の顔を持った妖精 (むしろ妖怪と呼ぶべきかもしれない) の登場、兄と妖精との戦いという順序で筋が展開し、兄の勝利と妖精の死、そして近親相姦的結婚の成就という結果となる。しかし物語はここからさらに続き、妖精が埋葬された場所から出現して野原を踊り狂う大量の野ウサギと、妖精が再生した形態としてのひとりの美しい若者の出現という印象的な結末がもたらされる。内容から判断するならば、この民話が比較的短いシークエンスの中に複数の登場人物間の入り組んだ関係や、象徴的で謎めいたモチーフ群を密度濃く詰め込み、物語としての充実を示していることが知られるのではなかろうか。

残念ながらヨヘリソンの民族誌に先行するコリマ・ユカギール民話の記録はごくわずかであり、それ以前の伝統を正確に知るのは困難である。けれども、ヨ

ヘリソンが行った調査の時点でこのように充実した民話群がすでに語られているということは、それに先立って民話の語りの豊かな伝統があったことを意味するといっても誤りではないだろう。事実それをうかがわせる資料もごく少数ある。たとえば Shiefner (1871) は、それ以前に何人かの探検家によって収集された断片的なユカギール語の資料をまとめて紹介している。その中に 1859 年の資料に基づいた一篇の民話テキスト（本文 87 語）が含まれている（435-436）。これは語形から判断する限りではコリマ・ユカギール語のものであり、物語の語られ方も上記の民話と類似している。

コリマ・ユカギール民話のこの伝統は、17 世紀に起こった帝政ロシアの東方進出以来この言語が被ってきた著しい衰退の過程にもかかわらず、今も生き残っている。たとえば Nikolaeva (1997) には 1980 年代後半に現地調査で採集された民話が約 80 篇収められている。この伝統は 21 世紀に入った現在でも絶えておらず、たとえば筆者は 1990 年代後半から 2000 年代前半において何篇かの民話の採集を話者に語ってもらい、その一部をテキスト資料として発表することができた (Endo (1997) ; 遠藤 (2005) 第 3 章の一部など)。それらの民話は話者によって流暢に語られたものであり、細部は異なるにせよ、形式はヨヘリソンの収集した民話にきわめて近い。一方、同時期に別のフィールドでコリマ・ユカギール語の研究を行った長崎郁もまた、母語話者によって語られたいくつかの民話資料を発表している (長崎 (1998) など)。

コリマ・ユカギール民話は、たとえば近隣のサハ（ヤクート）人の英雄叙事詩のような韻文による長大な詩のジャンルは持たない。散文の民話のジャンルとしては 2 つがあり、一方は ču:l'i:あるいは ču:l'idi:, そして他方は n'i:ji:l あるいは čuöledomni: n'i:ji:l と呼ばれる。Nikolaeva (1997:7) によれば、これらはそれぞれ次のような内容を持つ。まず前者は動物や妖精の話が多く、民族固有の神話的な観念を反映する。このジャンルには英雄やトリックスターなどの活躍する話も入る。これに対して後者は、語り手が現実にと起こったと信じる、最近のできごとを描写する。こちらのジャンルに含まれる話の種類は前者のものより多

様で、たとえば、他民族との戦争の話、シャーマンの話、超自然的な力との出会いの話、その他様々な伝説などがある。なお、これら散文による民話のほかに、コリマ・ユカギール民話には jaqte（歌）と呼ばれる比較的短い韻文の詩形があるが、この論文では考察の対象としない。

以上、コリマ・ユカギール民話が、比較的長い伝統を持ち、ジャンルの感覚も示すことを述べた。次の節では上述のジャンルのうち前者（ču:l'i:, ču:l'idi:）に属する民話を検討対象として、そのテキストを文体論の視点から観察してみることにしよう。

3. 文体論的考察

この節ではコリマ・ユカギール民話の語り手2人を選び、彼らの語った民話テキストに基づいて若干の文体論的考察を試みる。第1節で述べたように本論文で扱う問題は萌芽的なものであるため、以下ではひとつの統語構造だけに集中して考察を進めたい。その統語構造はコリマ・ユカギール語において特徴的な複文構造のひとつである節連鎖である。以下、まずコリマ・ユカギール語の節連鎖について基礎的概念を紹介し、次に民話の語り手2人による民話テキスト中での節連鎖の選択と使用について検討する。⁽⁵⁾

3.1 コリマ・ユカギール語の節連鎖

複数の節によって構成される文は類型論的にいくつかのタイプに分類されるが、節連鎖はそのうちのひとつのタイプをなす（Payne 1997:306-307）。節連鎖とは、節が鎖状に連なって複文を構成する構造である。筆者が採集した民話から、コリマ・ユカギール語の例を引用する。⁽⁷⁾

（5）以下であげる例文のうち引用元の表示がないものは筆者が現地調査で得たものである。Nikolaeva（1997）からの引用は〔NK25-10〕のように示す。最初のNKはこの資料を示し、次の数字は民話の番号を、ハイフンに続く数字はその民話中の文番号（原文に付けられたものに従う）を示す。つまり引用文はこの資料における25番目の民話の10番目の文番号にあたることを示している。

- (1) a. emej-pe-gi o:juol'i-t akurpe-t, ta:t akurpa:l'el.

母-複数-3 所 渴く-副動 怒る-副動 それから 怒り出す-不確実

(自 3 単)

「母はのどが渴いて、いらいらして、そうして怒り出した」

- b. taŋ paj taŋ nier juö-delle min'-delle moro-l'el-u-m.

その 女 その 服 見る-副動 取る-副動 着る-不確実-△-他 3 単

「女はその服を見て、それを取って着た」

これらはいずれも 3 つの節が鎖状に連なって構成された節連鎖である。それぞれの節は動詞で終わるが、動詞は節連鎖を終わらせることのできる定形動詞と、それができない非定形動詞に機能上分かれる。コリマ・ユカギール語の場合、節連鎖に用いられる非定形動詞は副動詞（主語を変えない場合）あるいは動名詞の所格形（主語を変える場合）である。たとえば (1a) の最初の節は副動詞 o:juol'it 「のどが渴いて」で終わり、やはり副動詞の akurpet 「いらいらして」に終わる次の節が続く、これに後続する最後の節は定形動詞 akurpa:l'el 「(彼女は) 怒り出した⁽⁸⁾ (そうだ)」によって終わる。

✓ (6) 節連鎖はもともとはパプア・ニューギニアの諸言語の記述に有用な概念として 1960 年代半ばから研究が進められた。その後の言語類型論研究の進展により、この概念は現在、他の地域における諸言語の記述にも応用されるようになってきている。この概念を開拓したひとりである Longacre (1985:264) が「現在までに報告されている節連鎖を持つ言語 (chaining languages) は述語が節の末尾に位置するものである」と指摘しているように、節連鎖はいわゆる SOV 型の語順類型を持つ言語の複文に多く現れる傾向がある。本論文で扱っているコリマ・ユカギール語もまた SOV 型の語順類型を持つ点でこの傾向と一致する。この視点から見るならば、同じく SOV 型の語順類型を示す日本語もまた節連鎖を持つ言語に属する (Myhill and Hibiya 1988)。

✓ (7) 以下の例文のグロスで用いる略語は次の通りである：形動＝形動詞，自＝自動詞，習慣＝習慣アスペクト，焦点＝焦点形，進行＝進行アスペクト，他＝他動詞，単＝単数（1 単＝1 人称単数，など），動名＝動名詞，不確実＝不確実法，複＝複数（3 複＝3 人称複数，など），副動＝副動詞，命令＝命令法，目的焦＝目的語焦点，3 所＝3 人称所有，↑＝つなぎ子音，△＝挿入母音。

(8) 節連鎖は等位接続構造と別種のものであることに注意されたい。節連鎖はたとえば英語の and のような等位接続詞を用いずに構成することができる。(1a) の ta:t 「それから」は単なる副詞であり、この節連鎖において必須の成分ではない。

コリマ・ユカギール語の節連鎖は、非定形節（非定形動詞を核とする節）を連ねることによってかなりの程度まで引き伸ばすことができる点が特徴的である。少なくとも純粋に文法的に見る限り非定形節の個数に制限を加える規則は見出されず、民話テキスト中には非定形節が5, 6回連続する節連鎖の例もかなりある。つまり非定形節の個数——つまり節連鎖の長さ——は文法的な制約によって決まるのではなく、話し手の選択によって決まる。この場合、話し手はどのような要因によって節連鎖の長さを決めているのだろうか。

筆者の考えでは、少なくとも2つの要因を指摘することができると思われる。第1の要因は、主語が変わることである。この場合、いったん節連鎖が閉じられ、新たな主語が現れることが多い。たとえば上記(1b)の節連鎖に続く談話は次のようである。(1b)の最後の定形動詞から続けて引用する：

(2) [...] moro-l'el-u-m. taŋ nodo titi=mie-l=ben

着る-不確実-△-他3単 その 鳥 そのような=状態だ-動名=もの
mol-l'el, ĵe kebeči:li.

言う-不確実(自3単) さあ 行く/自1複

「(...) (母はそれを) 着た。その鳥のようなものは言った、『さあ、行こう』」すなわち、新たな主語 taŋ (nodo titimielben 「その鳥のようなもの」) が現れることによって新たな文が開始される。その文は、さらにすぐ次の文でふたたび新たな主語(私たち)が現れることにより、節連鎖を作らずに単文で閉じられる。

第2の要因は、節が表す事態の相対的な独立性に関する判断であろうと思われる。つまり、独立していると話し手が判断する事態ほど、節連鎖から切り離して表現されることが多い。この状況を示すのが次の例である：

(3) tat marqil' ĵög-i. marqil'-gələ jö-m, tat

それから 娘 入る-自3単 娘-目的格 見る-他3単 それから
örn'ə-j, ubuj mol-l'el-ŋi.

叫ぶ-自3単 ほんとうに 言う-不確実-自3複

「娘が入ってきた。(男は) 娘を見た、そして叫んだ、『(皆の) 言ったと

おりだ』」[NK38-14]

2 番目の文は主語が変わることにより新たに起こされていると考えられる（上記の 1 番目の要因）。一方、2 番目の文 *marqil'gələ jöm* と 3 番目の文 *tat örn'əj* が、主語を同じくするにもかかわらず節連鎖を構成しないのは、この民話の語り手がそれぞれの事態を独立性が高いと判断したためであろう。物語の流れの上でこの両者は、男が娘を見てその美しさに驚いたことと、その印象が皆の評価と一致することを確認したことでますます娘を得たい気持ちになったことを示しており、その後の展開のためにどちらも重要である。独立性が高いと判断する根拠は十分にある。

これに対して、事態どうしが連関している度合いが強いと話し手が判断する場合には、節連鎖が使われる傾向が強い⁽⁹⁾。たとえば例文（1a）では「怒り出した」ことの背景に「のどが渇き」「いらいらした」事態があるので、ここには明らかな連関がある。（1b）は明白な原因・結果の関係に基づいてはいないが、それでも服を「見て」「手に取って」「着る」という一連の行動が短い間に連続して起こっていることに連関が認められる。注意すべきは、この連関の有無を判断するのが話し手であり、事態そのものに連関が内在しているわけではないということだ。たとえば（3）の場合、「娘を見た」ことが「叫んだ」ことの原因だという因果関係は十分想定できる。したがって話し手が連関を表現したいと望むならばここで節連鎖を使った可能性もある。文法と文体論が交差する領域にあるこの点を明らかにするためには、テキストから事例を集め、ていねいに読んでいくという経験的方法に頼るほかはないと思われる。

（9）たとえば Maslova（2003:386）は節連鎖の意味に関して「節連鎖は主題に関する統一性を表わすもので、節どうしの緊密な意味的一貫性を含む」と主張している。これは筆者がこの節で述べてきたことと概略一致しているだろう。

3.2 節連鎖の文体論的考察：2つの民話

3.2.1 A. V. Sleptsova 氏の民話

具体的な事例として、まず A. V. Sleptsova 氏（女性）の語った民話を取り上げ、その中の節連鎖を文体論的に考察してみたい。ここでは Nikolaeva (1997)⁽¹⁰⁾ に収録された 38 番の民話を検討する。この民話は 428 単語からなる。文の数は 112 個で、そのうち 25 文（文全体の 22.3%）が節連鎖である。⁽¹¹⁾ 物語の概要は次の通りである——あるところに父母と年頃の娘がいた。壁に掛かった狼の毛皮を神として毎晩お祈りをしていた。あるとき 1 人の男がその家にやってくる。男は娘を見て、皆の評判通りの美しさに驚く。父はその求婚を拒み、男を立ち去らせる。ある晩お祈りをしていると、狼の毛皮が「男に娘を与えなければ家を燃やす」と告げる。母と娘はうろたえるが、父は様子を見るように言う。また別の晩に同じお告げがあるが、やはり父は様子を見るように言う。ある日キツネが父の罠に掛かるという吉兆がある。その晩、同じお告げがあったときに、突然毛皮が壁から落ちる。見るとそこにあの男がいる。家族は身の回りの道具を持ってきて男をさんざんに打ち据える。実は男は犬であった。そして娘が欲しくて神のふりをしたことを白状する。

物語自体がサスペンスに満ちた筋を持っているが、この特徴は語りの言語形式上の特徴とも呼応している。上の数字からは、この民話の 1 文あたりの平均語数が 3.8 語であることがわかる。ここから必須の要素である動詞を除くならば、この民話の文はたいていが単文で、しかもその単文の要素は主語・目的語・最小限の副詞といった最小限の要素に制約されていることになる。上にあげた

(10) この論文で取り上げるふたつの民話の語り手には筆者も現地調査でお会いし、ご協力いただいた。その折に語っていただいた民話の文体は、この論文で取り上げたものと概略一致するという印象を持っている。それぞれの話者のプロフィールについては遠藤（2005）の第 3 章の注 21 と注 30 をご覧いただきたい。

(11) Nikolaeva (1997) は、おそらくプロソディーを考慮したと思われるが、いくつかの文のまとまりに対して文番号を与えている。たとえば例文 (3) では、ひとつの文番号に対し 3 つの単文が含まれている。本論文では文構造にもつばら注目し、このような場合は単文 3 つと数えた。したがって Nikolaeva (1997) の文番号と本論文での文のカウントとは必ずしも一致しない。

(3) の例文はその一例であるが、あわせて次の例も参照されたい：

- (4) ʃeʃpaɖaŋil' jɔkas', ʃar-ək peʃʃej-mələ tat
 扉 開く/自 3 単 何か-焦点 投げる-他 3 単・目的焦 それから
 es'e:-gi, örn'e:-j, jö-gik, met kejlə-j ʃaqaɭ-ə
 父-3 所 叫ぶ-自 3 単 見る-命令/2 複 1 単 赤い-形動 キツネ-具格
 idə.
 捕る (他 1 単)

「扉が開いた。そして何かを (彼らの) 父が投げた。そして叫んだ、『見ろ、私はアカギツネを捕ったぞ』」[NK38-42]

すべて単文の連続によって表現されるこの部分の印象は、新たな行動が次々と目の前で展開される躍動感に満ちている。この印象は、tat「それから」を除けば副詞が全く現れないことによって強められている。短い文の連続によるたたみかけるような表現からは、動きのある筋をきびきびと先に進めていこうという語り手の意志が伝わってくる。

節連鎖が使用されている部分について観察してみよう。この民話で初めて節連鎖が使われるのは男が突然登場する部分である：

- (5) irkiʃe modo-ŋi-də-gə irki-n ʃoromə-lək kel-u-l.
 あるとき 住む-複数-3 所-所格 1-↑ 人-焦点 来る-△-主焦

「そのように暮らしていると、あるとき、1 人の男がやって来た」[NK38-8]

物語が実質的に動き出すのはこの時点からである。ここで異主語の節連鎖を用いて、それまでの生活との対比 (という形での連関) を表現し、男の出現を際立たせるのは効果的である。そして男は求婚する。ここでも節連鎖が使われている：

- (6) ʃöu-dəllə mon-i, [...] tət marqil' mət-in terikə-ŋo:l
 入る-副動 言う-自 3 単 2 単 娘 1 単-向格 妻-様格
 kej-ŋik.
 与える-命令/2 複

「入ってきて言った、『(...) あなたの娘を私の妻にくれ』」[NK38-9]

ここでは節連鎖を用いることによって、男が何の躊躇もなく（おそらくはあらかじめ計画して）求婚したことがうまく表現されているだろう。このあとの男の行動は単文の連続で表わされており、唐突だが動きがある（上述の例文（3））。しかし求婚に対する父の返事は次のようである：

(7) čaj oʒə-lla ukej-k.

茶 飲む-副動 外に出る-命令/2 複

「茶を飲んで出て行け」[NK38-20]

節連鎖を用いて、一連の行動を速やかに済ませるように命令している。にべもない拒絶である。

神に化けた男の策略に翻弄される家族の行動もまた、節連鎖を用いて表わされている。あたかも男の意図したとおり家族の心が動いていくかのようだ：

(8) tamun mödi:-dalla tat ibil'e:-ŋi čumu-t jalo-t.

これ 聞く-副動 それから 泣き出す-自3 複 全て-副動 3(つ)-副動

「(彼らは) これを聞いて3人全員で泣き出した」[NK38-27]

しかし策略を見破ってからの家族の行動は組織的で素早い。この部分では家族それぞれの行動の描写に節連鎖を用いている。次は娘の行動である：

(9) marqi-pə-gi tude jekečan kes'i:-dalla tabud-ə ʃolxi:la:-m.

娘-複数-3 所 3 所 鍋 持ってくる-副動 それ-具格 叩きはじめる-
他3 単

「娘は自分の鍋を持ってきて、それで（男を）叩きはじめた」[NK38-53]

この部分では節連鎖が集中的に使われており、家族が協力して悪い男を懲らしめるややユーモラスな様子が効果的に表現されている。

この民話の語りは、単文の連続を基調とした前進的な語り口の中に、効果的に節連鎖を織り込んでいる。つまり、男の唐突な行動や、男の策略が露呈する瞬間など印象に残る行動は単文の連続で表わすことによって緊張感を持続させている。これに対して、予測可能であったり組織的であったりする行動は節連鎖で

表わすことによって筋のよどみない展開をもたらしている。この民話の中の節連鎖は、筋の展開に適切な緊張感とめりはりをつけることに貢献していると言えよう。

3.2.2. V.G.Šalugin 氏の民話

次に V.G.Šalugin 氏（男性）の語った民話を文体論的に考察する。ここで取り上げるのは Nikolaeva（1997）に収録された 46 番の民話である。この民話は 390 単語からなる。文の数は 52 個で、そのうち 28 文（文全体の 53.8%）が節連鎖である。この数字からただちにわかるとおり、こちらの民話は前節のものと比べると、節連鎖の使用頻度が高く、文に対する比率では前節の民話の 2 倍を超えている。物語の概要は次の通りである——昔ある村に孤児の女の子がいた。女の子は養父母に引き取られて育つが、そこで朝から晩まで家事や育児にこき使われる。つらい労働の終わった月夜の晩、女の子は桶を持ったまま月を眺め、その静かな世界に行くことを空想する。あるときその願いを口に出すと、月が地上に降りてきて女の子を月に連れ去る。村の人々は姿を消した女の子を捜し回る。あるシャーマンが、女の子が月に行ったことを告げる。人々が外に出て月を見ると、確かに月の表面には桶を持った女の子の模様があった。

この民話の 1 文あたりの単語数は 7.5 単語であり、前節で考察した民話の約 2 倍の長さである。これはもちろん節連鎖が多用されていることと相関しているが、もうひとつの要因も指摘できる。それは、この民話の語りが物語の背景を詳細に描写しようとする傾向を持っているということだ。たとえば次の例を観察してみよう：

- (10) tittə numö-gət unuŋ jaŋil laŋin kes', tude ...n'er-gi cumu
 3 所 家-離格 川 岸 側へ 来る/自 3 単 3 所 服-3 所 すべて
 əjl'e:-nunnu-j.

なくなる-習慣-自 3 単

「(女の子は) 彼ら (=養父母) の家から川岸へと来た。彼女の服はぼろ

ぼろになっていた」[NK46-6]

これは物語の開始部分に近い箇所にある、孤児の女の子が従事させられるつらい労働を描写した2つの文であり、文構造上はどちらも単文である。ここで最初の文は女の子の行動に対して場所を含んだ詳細な描写を与え、次の文は女の子の行動をいったん離れて服装に目を向ける。語り手は明らかに、さまざまな角度から女の子の労働の過酷さを描写しようと試みている。ここにはおそらく語り手の描写に対するこだわりがある。この民話での節連鎖の多くも、この傾向の延長線上にあって、描写に奥行きを与える表現手段として用いられている。このことを支持するのが、この民話の中での節連鎖に多用される形式である。つまりここでは、連続した行動を表わす -delle 副動詞（「～して（から）」）よりはむしろ、事態の同時性を表わす -t 副動詞（「～しながら」）およびその否定的表現にあたる el=～-s'uon（「～しないで」）が多用されているのだ。⁽¹²⁾ 次は女の子が労働で疲れきった状態を描写する部分である：

(11) s'ilə-gi ulumu-t iləmədə tat uŋʒu:-nu-l'əl

力-3 所 尽きる-副動 ときどき それから 眠る-進行-不確定（自3 単）

əl londə-s'o:n, əl alɣar gude-s'o:n.

否定 脱ぐ-結果 否定 下へ なる-結果

「力が尽きて（彼女は）ときどき眠った、服も脱がずに、脱いだものを下へも置かずに」[NK46-8]

この節連鎖で使われている副動詞はいずれも事態の同時性を表わす。この結果、彼女の従事する労働の過酷さが詳細に、かつ効果的に描き出される。

このような描写へのこだわりは、一方で筋の展開の遅さを招く。この民話でようやく筋が動き出すのは全体の3分の1を過ぎた箇所である。ここで孤児の女の子は水運びのために外に出るのだが、この筋の動きもすぐに3つの副動詞を用いた節連鎖の描写によって静止してしまう：

(12) ここで等号(=)は前接語(proclitic)とそれ以外の部分との境界を示す。Nikolaeva (1997)はこの形式を小辞として解釈しており、切り離して表記している。

- (12) taŋ tittə tuis-ə moʝ-t kinʝə n'a:s'-in oʝo:t jö-t
 その 3 所 桶-具格 持つ-副動 月 顔-向格 立つ-副動 見る-副動
 önmə-gə l'i:-l'əl-u-m, [...]

知恵-所格 支える-不確定-△-他 3 単

「(養父母の) 桶を手を持ったまま月に向かって立ち、(月を) 見て (女の子は) こう考えた (...)」 [NK46-14]

女の子の口にする願い自体も、節連鎖を用いることによって描写の中に組み込まれる：

- (13) irkiʝe [...] iʝulbə-llo ninʝe:-l'əl kinʝe-gət, kinʝə,
 あるとき 疲れる-副動 頼む-不確定 (自 3 単) 月-離格 月
 mət-ul min, mon-u-t, tət laʝin.

1 単-目的格 取る (命令・2 単) 言う-△-副動 2 単 側へ

「(...) あるとき (女の子は) 疲れてしまい、『月よ、私をあなたのところ
 に連れて行って』と (言って) 頼んだ」 [NK46-16]

このような描写は丁寧に描かれた絵のような印象を与えるけれども、それは孤独な女の子と月のひそやかな交感が支配するこの民話の世界にふさわしいかもしれない。月が女の子のところに降りてくる瞬間は、異主語の節連鎖で描写される：

- (14) [...] tat ann'ə-də-g ə kinʝə ti: endi:
 それから 話す-3 所-所格 月 そこに そこに
 kel-l'əl al'-də-gə.

下-3 所-所格 来る-不確定(自 3 単)

「(...) (彼女が) そう話すと、月はそこに降りてきた」 [NK46-18]

月はこうして彼女を連れ去る。あたかも事態の自然な帰結であるかのように。

この民話の中では、節連鎖が (おそらくは意識的に) 使われていない箇所がある。そのひとつはシャーマンのお告げの部分である：

- (15) tinj tit ö tinj me:stə-gə əjl'ə. kizu:- ŋin

この 2 複 子供 この 場所-所格 ない (否定法・自3単) 空-向格

merej-l'al, anda: kinjə-gə tottu:-l'al tat.

飛ぶ-不確実(自3単) そこ 月-所格 貼りつく-不確実(自3単) それから

「お前たちの子供はこの場所にはいない。(彼女は) 空に飛んでいった。

そして月に貼りついた」 [NK46-27/28]

単文3つの連なりは、節連鎖を多用した丁寧な描写との対照において、かなりぶつきらばうに響く。しかしそのことはかえてこのお告げの決然とした調子を高めているだろう。そして人々は外に出て自分の目で確かめる：

- (16) tabud-ə ukej-dallo jö-l'al-ŋa:, ejta: anda: tude

これ-具格 外に出る-副動 見る-不確実-他3複 そちらで そこで 3所

tuis moj-də ern'e:s'i:-t tanda: oko:-l.

桶 持つ-副動 広げる-副動 そこで 立つ-動名

「そこで人々は外に出て見た、そこ (=月の表面) で (女の子が) 手を

広げ、桶を持って立っていた」 [NK46-29]

ここでは3種類の副動詞を含む節連鎖の連続により、人々の行動や月の模様のありさまが丁寧に表現されている。

この民話の語りは、事態の同時性を表わす副動詞による節連鎖を多用することによって、物語の背景を丁寧に描写することを試みている。語り手の関心はおそらく、筋のよどみない展開よりはむしろ、物語の周囲にある事態を可能な限り物語の本筋に関連付け、重層的な世界を作り上げるもののほうにあるのではないか。その中にある異質なのは、語りの中の2箇所、つまり少女の願いとシャーマンのお告げだけに現われる、唐突とも言える単文の連続である。この部分は構文上の単純さがかえて新鮮な驚きをもたらす箇所である。

4. 結びにかえて

以上2つのコリマ・ユカギール民話を取り上げ、特に節連鎖という文法構造

に注目して文体論的分析を試みた。その結果明らかになったことは次の2点である：(1) 同じ少数民族の、同じジャンルに属する民話の中でも、語り手によって節連鎖の頻度や使い方は異なる。そして、(2) そのような語りの違いは、話の中で語り手が表現したい部分の違いと相関している可能性がある。ただしこの第2点については、もっと多くの民話を調べることによって、今後さらに検討を進めなければならない。

物語の筋のよどみない展開と、描写による物語の世界の奥行きは、おそらくすべての語り手（日本語の文化であれば書き手）にとって望ましいことであろう。しかし語り手もひとりの人間である以上、この両者のどちらかにより魅力を感じ、その可能性を追求する方向に賭けてみることはありうる。本論文で扱った第1の民話の語り手は節連鎖を注意深く制約して用いることで前者に賭け、それに対して第2の民話の語り手は節連鎖の可能性に注目することで後者に賭けた。日本語の文化における平行性を指摘するならば、前者はたとえば『風の歌を聴け』における村上春樹の文体に、後者はたとえば『千年の愉楽』における中上健次の文体にあたるとも言えるだろう。コリマ・ユカギール民話という小世界の中で、節連鎖の文体的可能性を探求した2人の民話の語り手に敬意を表しつつ、このささやかな論考を終わりたいと思う。

参考文献

- Endo, Fubito (遠藤 史) (1997) Kolyma Yukaghir text with grammatical analysis (1): People who hear the language of birds. 『経済理論』 278:205-217. 和歌山：和歌山大学経済学会.
- (2005) 『コリマ・ユカギール語の輪郭——フィールドから見る構造と類型——』 名古屋：三恵社.
- Jochelson, Waldemar (1926) *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus*. The Jesup North Pacific Expedition, volume 9, Memoirs of the American Museum of Natural History. Leiden: E.J.Brill.
- Leech, Geoffrey N. and Michael H. Short (1981) *Style in fiction: A linguistic introduction to English fictional prose*. London: Longman. (日本語訳：ジェフリー・N・リーチ、マイケル・H・ショート (2003) 『小説の文体：英米小説への言語学的

アプローチ』東京：研究社。）

Longacre, Robert E. (1985) Sentence as combinations of clauses. In: Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description*. Volume 2: 235–286. Cambridge: Cambridge University Press.

Maslova, Elena (2003) *A grammar of Kolyma Yukaghir*. Mouton Grammar Library 27. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Myhill, John and Junko Hibiya (1988) The discourse function of clause-chaining. In: John Haiman and Sandra A. Thompson (eds.) *Clause combining in grammar and discourse*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

長崎 郁 (1998) 「ユカギール語コリマ方言の民話資料」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』1:50–66. 千葉：千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

Nikolaeva, Irina (1997) *Yukagir Texts*. Specimina Sibirica XIII. Szombathely: Savariae.

Payne, Thomas E. (1997) *Describing morphosyntax: A guide for field linguists*. Cambridge: Cambridge University Press.

斎藤君子 (1993) 『シベリア民話への旅』東京：平凡社.

----- (編訳) (1988) 『シベリア民話集』東京：岩波書店 (岩波文庫).

斎藤兆史 (2000) 『英語の作法』東京：東京大学出版会.

Schiefner, Anton (1871) Beitrage zur Kenntniss der jukagirischen Sprache. *Mélanges Asiatiques* 6(3,4):409–446. St. Peterbourg.